

矢ノ口遺跡

—昭和61年度県営圃場事業湯川地区内
埋蔵文化財発掘調査報告—

1986

茅野市教育委員会

序 文

矢ノ口遺跡は国史跡上ノ段遺跡と至近の距離にあり、かつ古くからの交流路である大門峠への登り口に位置するため、宮坂英式先生の発見以来、この土地では注目されてきた遺跡の一つであります。

この度南信土地改良事業所所管の県営圃場整備事業に伴い、遺跡の一部が破壊されることとなったため、埋蔵文化財保護の立場から、矢ノ口遺跡の緊急発掘調査を茅野市教育委員会が委託を受けて実施したものです。

発掘調査では谷状の地形と縄文時代の若干の遺物が発見され、今回の発掘地点が遺跡の南側の限界を示すものと考えられました。したがって、矢ノ口遺跡の詳細については中心部の調査もふくめ、なお今後の調査にまたなくてはならないであります。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会、南信土地改良事務所、及び湯川区の皆様の深いご理解とご助力により、無事終了できたことを心からお礼申し上げます。また、炎天下の困難な発掘作業に従事していただいた調査団の皆様、そして報告書の刊行に尽力いただいた方々に深く感謝申し上げます。

昭和62年3月15日

茅野市教育委員会

教育長 小島与四男

目 次

序 文	第III章 遺跡の層序
第Ⅰ章 調査経緯	第IV章 遺構と遺物
第1節 調査にいたるまでの経過	第1節 検出された遺構と遺物
第2節 発掘調査の経過	1 谷状地形
第Ⅱ章 遺跡概要	2 出土遺物
第1節 遺跡の地理的環境	第V章 結 語

第一章 調査経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過

昭和58年度から開始された県営圃場整備事業湯川地区は、昭和61年度には湯川区集落の東北側一帯へと進められることとなった。この昭和61年度の当該事業の実施区域内に矢ノ口遺跡が一部含まれているため、矢ノ口遺跡の保護協議が昭和60年9月5日、長野県教育委員会、南信土地改良事務所、茅野市耕地林務課、茅野市教育委員会により現地で行われた。その結果、事業区域内に含まれる部分については350m²以上を茅野市教育委員会が主体となって発掘調査を行うこととなった。

事務手続きは、昭和61年4月22日付国庫補助金交付申請、県費補助金交付申請を行い、7月に入つて諒訪地方事務所長と茅野市長との間に「埋蔵文化財包蔵地発掘委託契約書」を取りかわし、つづいて茅野市長と茅野市教育委員会の設置した矢ノ口遺跡調査委員会委員長との間で再委託契約を締結した。発掘調査は矢ノ口遺跡調査委員会が行うこととし、矢ノ口遺跡調査団を編成し、昭和61年7月31日から調査に入った。

調査委員会の組織

委員長 東城喜良（教育委員長）

副委員長 小川昇一（教育委員長職務代理）

委員 小島与四男（教育長） 今井利弥（教育委員） 今井千浩（教育委員） 山本秋男（市議会社会文教委員長） 矢崎孟伯（文化財審議委員長） 宮坂和茂（社会教育課長） 五味 孝（耕地林務課長） 五味 清（財政課長） 鵜飼幸雄（調査団長）

調査団の組織

団長 鵜飼幸雄（日本考古学协会会员・茅野市教育委員会学芸員）

副団長 守矢昌文（茅野市史実考古館学芸員）

調查員 小林深志（茅野市教育委員会学芸員）

調査補助員 矢嶋恵美子（長野県考古学会会員） 武居八千代（長野県考古学会会員）

関喜子（長野県考古学会会員） 伊東みゆき（明治大学学生）

事務局

事務局長 小島与四男（教育長） 事務局次長 宮坂和茂（社会教育課長） 事務局係長 伊藤修平（文化財係長） 局員 柳沢士郎（社会教育係） 池田文子（社会教育係）

発掘協力者

竹内和子 竹内重光 竹内重行 萩原竹左衛門 平島一男 両角政郎 両角孝次 両角ちどり 横間好衛

第2節 発掘調査の経過

遺跡の南端に当たると思われる部分の内、調査は旧地形を残しているとみられる公図1477・1479番について行われた。

調査区は斜面の長軸方向を基線とした。この基線は磁北より東に77度振ったものである。これに直交する線をA～Bとし、4m×4mのグリッドを設定した。調査面積は480m²である。

調査はグリッド法により遺構確認を行い遺構調査に入る予定であった。しかし遺構は検出されず、検出された谷状地形は自然地形であることが判明したため、谷状地形の層位観察を行って調査を終了した。

調査日誌

昭和61年7月23日（水）

重機で表土の除去を行う。まず基本層位を把握するために一部を深掘りした。その結果地表から基盤層までの深さは120cmを測る。厚く土層が堆積していることから、遺物が含まれていると思われる部分まで土砂を除去する。

7月29日（火）

発掘機材撤入を行う。

7月31日（木）

本日より発掘調査を開始する。社会教育課長宮坂和茂氏、文化財係長伊藤修平氏、調査団関係者、作業員等により新団式を行い調査に入る。

調査区全域にグリッドの設定を行う。グリッドは4m×4mを基本とし、南北方向にA～F、東西方向に1～5とする。グリッド設定後調査区の地形測量、遺構検出作業を開始する。

8月1日（金）

作業は遺構検出作業。その結果調査区を縦断する形で谷状地形を検出す。谷状地形の土層状態を確認するこめ、A～F-3列についてトレンチを設定し、深掘りを行う。

8月2日（土）

谷状地形に設けたトレンチの掘り下げ及び土層観察を行う。その結果この谷状地形は自然地形と判明する。土層状態確認のためA～D-5列を設定。

8月5日（火）

昨日の雨のため谷状地形の約1/3は冠水状態となり、斜面の礫層に湧水が見られる。そのため谷状地形の調査は不可能となる。作業はG列方向へ遺構の確認を行う。

8月6日（水）

G列までの遺構確認調査の結果、調査区の大半は谷状地形で、人工的な遺構等は検出されなかつたために本日で発掘調査を終了する。午後機材を撤収する。

第II章 遺跡概要

第1節 遺跡の地理的環境

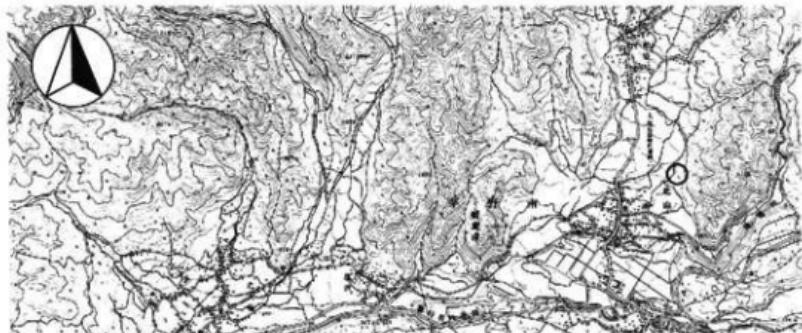
八ヶ岳連峰の最北端に位置する蓼科山、この西南部に八子ヶ峰山塊は位置する。その西縁は、八子ヶ峰より派出した山脚の末端が入り組んで達なる山裾となり、追出川等の小河川によって形成された小扇状地状の比較的開けた地形へと続いている。

矢ノ口遺跡は湯川集落の東北側のそのような山裾に位置しており、近くには市上水道の水源となっている追出川の湧水があり、年間を通じて豊富な水が湧き出ている。現在遺跡の立地する山裾は畑地・水田に利用され、段状に削平されて旧地形はかなり改変されているが、全体の様相より山裾部から開けた地形へと変わった部分に位置しているとみられるのであり、今回の発掘地点は遺跡の中心部よりはやや高い位置にあたるものとみることができよう。発掘地点の標高は986mである。

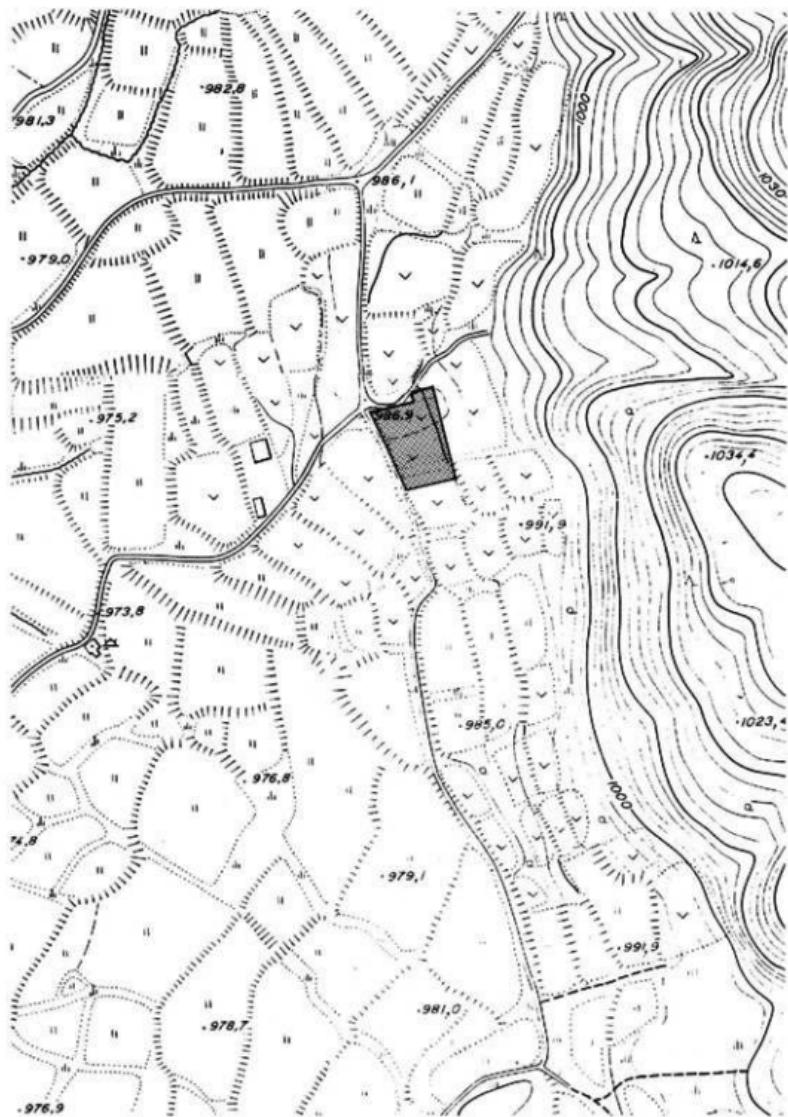
遺跡周辺には数個所の遺跡が点在している。追出川を隔てた舌状台地状の地形には国史跡である上ノ段遺跡が立地している。上ノ段遺跡は縄文時代早期から平安時代にわたる遺物が出土し、特に縄文時代後期から晩期にかけての貴重な資料が得られている。昭和10・11・13・16年に宮坂英式により調査が行われ、昭和13年の調査では矢ノ口遺跡より土師器・須恵器等の採集もなされている。

音無川を隔てた霧ヶ峰山麓の小台地には高風呂遺跡が立地する。この遺跡は昭和59年度の県営圃場整備事業に伴い発掘調査が行われ、縄文時代早期末から中期の集落跡が検出されている。

註1 宮坂英式「長野県諏訪郡北山村上ノ段遺跡発掘に依る縄文弥生両文化接触に関する一資料」『歴史地理』第73巻第5号



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)



第2図 遺跡周辺の地形と発掘区(1/2,500)

第III章 遺跡の層序

今回調査した地点は、山腹よりのびる比較的傾斜の強い地形に位置するため土層は基盤層まで厚く堆積していた。また、山腹から流出して堆積した土層は複雑な状態を示しており、山礫・山砂等の堆積が著しい。7月23日に行った土層確認のための深掘で基本的な層序を確認したが、それによると、I層—漆黒色土層(耕土)、II層—礫混入茶褐色土層、III層—粘性暗黒褐色土層、IV層—暗茶褐色土層(地山)と堆積し、その厚さは120cmを計った。

I層 漆黒色と砂礫を比較的多く含有し、まれに炭化物が混入する。色調は漆黒であるが砂礫を含有するためか粘性は少ない。

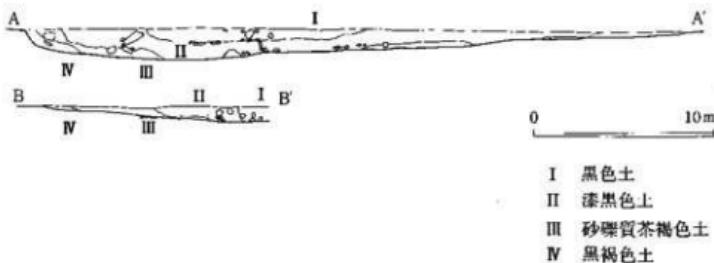
II層 磯混入茶褐色土—砂礫を多量に含有し、ボロボロした感じである。部分的に黄色の砂質ロームが混入する。色調は茶褐色を呈する。

III層 粘性暗黒褐色土—I・II層に比べ砂礫の含有は少なく、粘性が強い。

IV層 暗茶褐色土—地山層に相対し、山礫等の混入が著しく、全体的に砂礫質である。色調は茶褐色を呈し、部分的に黄褐色の砂礫部が混入する。

明確な遺物の包含層は検出されず、全体的に周辺より自然流入した土砂が堆積し、これに伴い遺物が混入したものと考えることができる。なお、検出された谷状地形は第III層中より形成されていたと思われる。

現地形の段々畑は谷状地形が全て埋没し、ある程度の時間を経過した後(第II層の堆積)、傾斜地を削平し段々畑に造成したものと思われる。

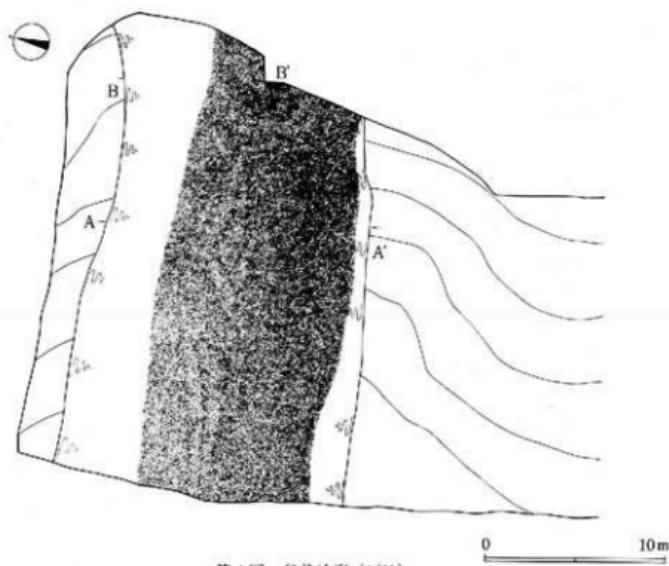


第3図 谷状地形の層序 (1/40)

第IV章 遺構と遺物

第1節 検出された遺構と遺物

1 谷状地形（第4図・図版1）



第4図 谷状地形 (1/60)

人工的な遺構ではないが、自然の谷地形が検出されている。地形はI・II層を重機で剥いた際に調査区のはば中央部を縦断する形で砂礫を多量に含む部分が帯状に検出された。この遺構について人工的なものか自然的なものかは表土剥ぎの段階においては確認できなかったが、土層の観察等より自然の谷地形であることが判明した。谷地形は東西方向に走り、その幅は最大部分で16mを測る。東側山腹付近では西側の開口部に比べてやや幅が狭くなるものの、ほぼ同じ位の幅で縦走している。深さは検出面上より最深部で約70cmを測り、断面形は不整のU字形を呈する。谷地形の肩部は北側では割合明確な落ち込みが確認されたが、南側においてはなだらかな傾斜で立ち上がっている。谷部の土層の状態は4層よりなる。

I層 黒色土—色調は黒色を呈し、内部に小砂粒を含有する。

II層 漆黒色土—I層に比べ色調がより黒味を増し、粘性が少なく内容物のためかザラつく感

がある。内部には砂粒や砂質褐色土粒子を含有し、微量ではあるが炭化物の微粒子を含む。

III層 砂礫質茶褐色土—I・II層とは異なる砂質の層で、砂礫を多量に含有しザラつきのみられるものである。

IV層 黒褐色土—III層よりも黒味が強く、内容物も砂礫等の含有は少ない。

以上のような土層堆積を谷地形は示していたが、II層からIII層までの間で遺物の検出された個所はなく、I層部分に集中する傾向を示した。しかし、土層の状況より考えると、この谷部は山腹より流出した上砂が自然的に堆積したものとらえることができる。そのため多量に含まれている礫等は山腹より崩落してきたと思われる角張った山礫で、それらが多量に谷部の中央部に集中する傾向が認められた（第4図のスクリントーン部）。

上層状態、谷部の状況等より考えると、この谷地形は人工的な溝とは考えられず、山腹より大水等の災害により崩落した所謂ナギ状の地形と考えることができようか。また、この地形内より出土した遺物は、その多くが小片で若干の磨痕等が認められる点から、これらの遺物は谷周辺より土砂と一緒に流出してきたものとみることができる。

2 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は図示したものがすべてである。土器片5点、剣片3点、石鏃1点で調査面積に比べ、その数量は少ない。また、全体的に若干の摩耗が認められ、文様等も不鮮明な部分が多くあった。

遺物は第5図に示したような出土状況を示した。これによると調査区の上部に散在する傾向が看取できるが、これらの遺物は一定の集中傾向、また、出土層位にもばらつきがみられ、生活の痕跡を示す集中ではなく、むしろ谷地形に自然流入したものとしてとらえることができる。

土器

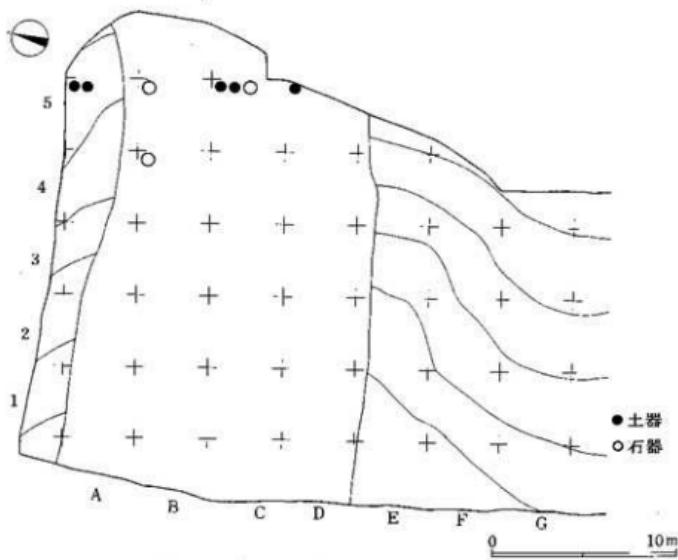
5点の中、器形をうかがえるような大型破片はない。判明している文様等より、縄文前期末3点、中期末2点であった。

1～3は縄文前期末の土器片である。全て半截竹管状工具により施文されるもので、諸磯C式に比定される。

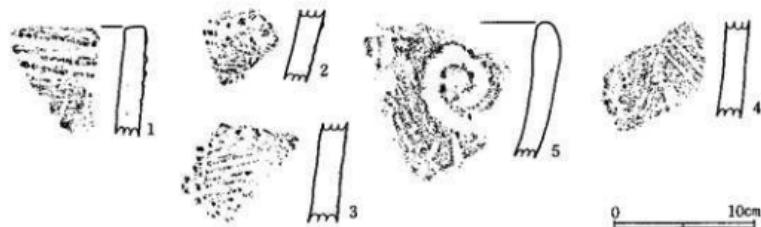
1：C-5グリッド出土。文様は地文に半截竹管状工具による平行沈線、これに三条の横位の浮線文が貼付される。浮線上には不鮮明ながら竹管状工具による連続爪形文が施文される。胎土には長石粒子と思われる砂粒を含有している。

2：C-5グリッド出土。地文に半截竹管状工具による平行沈線文が施文され、これに3条の横位の浮線文、さらにこれにクロスするように2本の浮線文が貼付されている。胎土には割合多量の長石粒子と思われる砂粒を含有している。焼成は比較的堅緻で、裏面は箆状工具により良く研磨されている。

3：C-5グリッド出土。地文に半截竹管状工具による平行沈線文が施文される。この平行沈



第5図 谷状地形の遺物平面分布 (1/60)



第6図 谷状地形出土土器 (1/3)

線は1・2に比べ整然としており、矢羽根状の構成をとるものと思われる。この平行沈線に直行するような形に連続結節状沈線文が施される。胎土には砂粒を含有しザラつく。

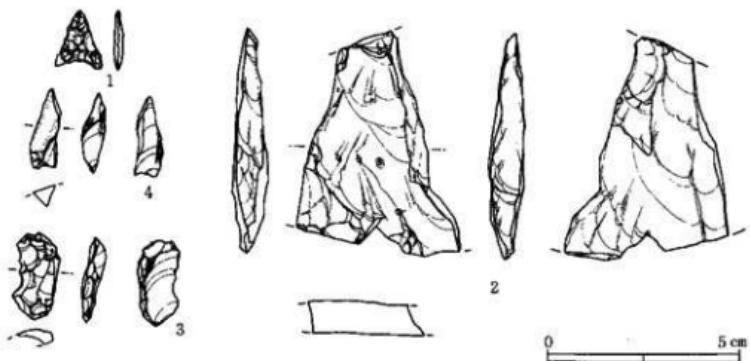
4・5は中期末葉の土器片である。施文等より曾利式に比定される。

4：A-5グリッド出土。箇状工具により「ハ」字状沈線が施文される。沈線は割合シャープに切られている。胎土には長石、角閃石等の砂粒を含みザラつく感が強い。

5：A-5グリッド出土。地文には不鮮明ながら「ハ」字状をなす箇状工具による沈線が施文される。この地文を切るように太目の沈線で左巻きの渦巻文が施文される。全体の文様は所謂唐

草文の構成をとると思われる。胎土には砂粒が多く含有しザラつく。

石器



第7図 谷状地形出土石器 (3/2)

4点が出土した。その内石器としては1の石鎌のみで、他は剥片類である。

1：B-5グリッド出土。色調が漆黒を呈する黒曜石を素材とした石鎌である。脚部の挟りが小さく、長さと幅が同率の平面形状が正三角形を呈するものである。調整は割合丹念で、特に脚部の挟りの調整は入念である。

2：表採。硬質玄武岩製の剥片である。横剥ぎ剥片の側縁部両端をファシット状の調整を加え分断している。そのためこの面が所謂截断面状となり、一見影刻器的な石器に見える。また、剥片上端部に細かな刃こぼれ状の痕跡が認められ、この剥片が何らかの形で石器として用いられていたことがうかがわれる。

3：C-5グリッド出土。漆黒の色調をもつ黒曜石剥片である。裏面の一部にポジティブな打瘤をもつ、主要剥離面を残している。この状態より考えると継長の素材剥片が想定できる。この素材剥片に所謂両極打法を加えており、そのため剥片の両端に階段状剥離様の潰れた剥離が観察できる。

4：B-4グリッド出土。一見スパール状の剥片である。一面に自然面を残し、二面に継長状の剥離が認められ、断面が三角形を呈する。剥片下端に剥離の際に生じたと思われる潰れた様な痕跡が観察できる。剥片の状況より透明度の高い平坦な面を持つ粒状の黒曜石を素材としているようである。

第V章 結 語

矢ノ口遺跡が発見されたのは、宮坂英式氏が上ノ段遺跡の発掘調査を続けていた昭和13年のことである。宮坂氏はその時の発見の様子を次のように記している。

「二日目、発掘中の私の所へ農夫が来て、この先で、田普請をしたら、土器が出た、見にこいとのことで、私は、同じ縄文系統のものであろう位に考えて行った。場所はここより二丁程東、この墓地を開む丘の西面傾斜する中腹で、「矢ノ口」という一帯の畑地、足元からは彼の追出川が湧き出ている。今この畑地の傾斜面を切り取る田普請のための地均工事中で三人働いて居た。畦には発掘され土器破片が多数捨てられてある。其等は私の推測を裏切って全部弥生式と埴部で縄文式系統は一片すら交えなかった。口縁部五、六個、底部七、八個と胴部の破片が多数で、惜しいことには、精形のものは通行の村人が興味半分に持ち去ったとのことであるから、どの程度出土したか判らない。他に祝部土器破片二個切り取りの土から採取した。」

更に切取面を調べると断面高さ2m近く上層30cmの黒土層、以下基盤の中土層で、その中土層には相当の範囲にわたって埴土層の食い込みがあり、従ってここが竪穴住居であることは明白である。尚黒土層中からは厚手縄文土器の一破片を石匙、石彈凹石と共に採取した。」

『歴史地理』73-5(1939)に紹介された以上の発見の様子と遺物の記録からみると、この時発見された竪穴住居址は平安時代のものであつたらしく、土師器や須恵器はその住居址に伴つたものとみることができる。弥生式とされた土器も、図示されたそれは平安時代の土師器の甕であった。

今回の発掘調査地点は遺跡の南側の限界を示す部分に当たると思われるが、調査区からは縄文時代の若干の遺物と谷状の地形が発見されたのみで、平安時代の遺物等は発見されなかつた。昭和13年に発見された竪穴住居址と土器の出土地点を特定することはできなかつたが、その場所も含め、遺跡の中心部は恐らく追出川の水源に近い北西側のよりなだらかな地形の部分が相当するものと思われる。

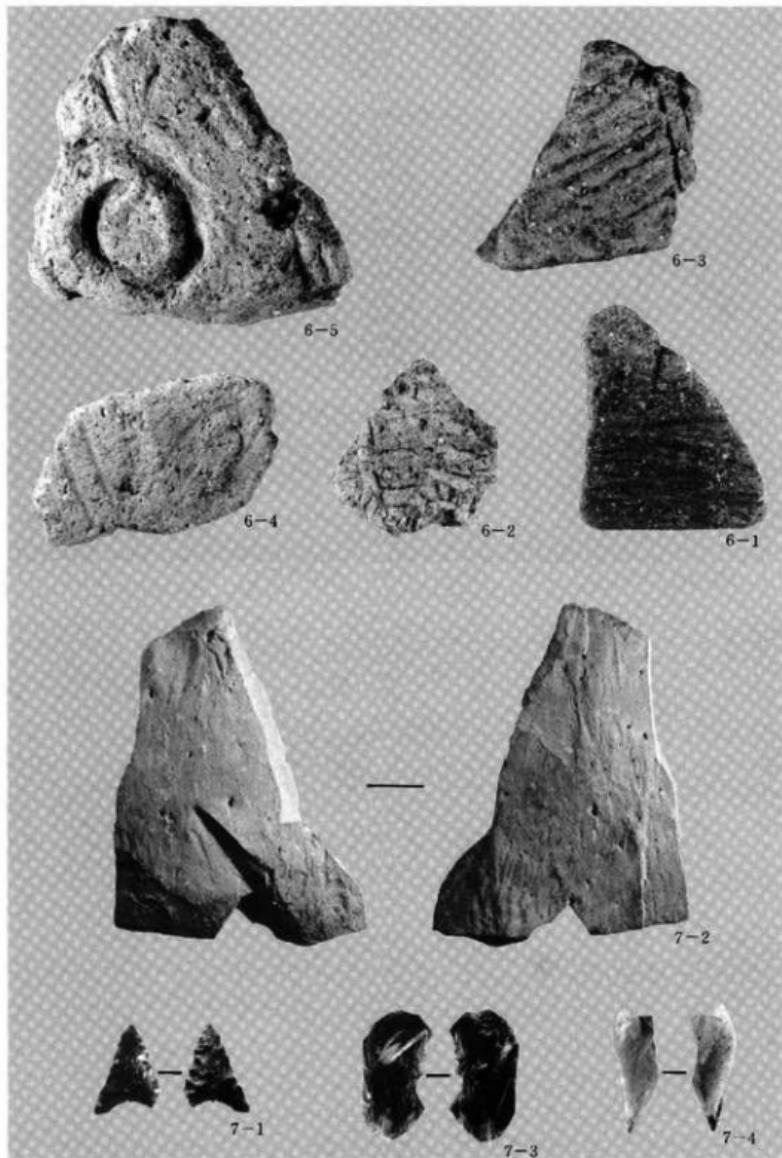
原始からの交流路である大門峠への上り口に位置するこの一帯は、古代に至つては古東山道のルートにあたる地として、また時代は下るが樹形城や経塚がつくられたことも、この土地がこの地方の歴史上にはたした、おもに交通上の役割の大きさをもがすものであろう。今回の発掘調査では、矢ノ口遺跡をそのような視点から語れるだけの資料は得られなかつたが、平安時代の竪穴住居址が発見されている事実からは将来さらに具体的な資料が追加される可能性の高いことを指摘できるのであり、その点を強く主張し本調査のまとめとしたい。



1. 路跡遠景（西方より）



2. 谷状地形全景



3. 出土遺物

矢ノ口遺跡

昭和61年度県営圃場事業湯川地区
内堀蔵文化財発掘調査報告

昭和62年3月8日 印刷

昭和62年3月15日 発行

編集発行 長野県茅野市塚原2丁目6番地1
茅野市教育委員会
印刷 長野県長野市中越293栄岐第1ビル
ほおづき書籍株式会社

